

25. ^{81m}Kr ガスによる肺吸込スキャン(その2)

—局所肺機能評価の試み

小林 英敏 佐々木常雄

改井 修 小原 健

松原 一仁 大野 晶子

真下 伸一

(名大・放)

^{81m}Kr ガス、LFOV シンチカメラおよびシンチパック 200 を用いて、被験者を坐位とし、前方および後方より各々 1 回呼吸法により肺シンチを行ない、これを単純写真と比較した。また、肺野を四分割し、おのおのの区画の 0.5 秒間の RI カウントを読み出し、これより呼出期の RI カウントの減少率、すなわち、RI の「呼出率」を計測した。これは区画の容積減少率、すなわち、局所の時限肺活量に相当し、これを左右で比較した。

正常例 1 例、原発性肺癌 1 例および肺転移 2 例の 4 症例につき検討し、RI の「呼出率」は局所の肺の換気能、閉塞状況の程度によく相関があることがわかった。

26. 頸部リンパ節シンチグラフィーの検討

○仙田 宏平 金子 昌生

真野 勇 高橋元一郎

(浜松医大・放)

白石 輝雄 椎名 睦郎

(聖隸浜松病院・耳)

リンパ節シンチグラフィーは、手技が簡便で、

患者への侵襲がほとんどないなどの理由で、容易に施行できる長所がある。しかし、本検査法は、皮下注射の部位を変えるだけで、全身の主なリンパ節群の描画が可能となる大きな利点がある。しかし、本検査法は、解像力が低いなどの欠点のため、従来普及されるに至っていない。そこで、今回、理学的所見との対応がしやすい頸部リンパ節について、本検査法の基礎的な問題を検討したので、若干の臨床的検討を加えて報告する。

対象は頭頸部癌などの患者 19 名で、これら患者に計 22 回の検査を行なった。放射性医薬品として、 ^{198}Au コロイドと 3 種の ^{99m}Tc コロイド製剤を使用したが、これらの内で ^{99m}Tc フチン酸が最も良い画像を示した。皮下注射部位は頭頂部 1 カ所またはこの両側 2 カ所とし、後者でより安定した画像が得られた。皮下注射に際し、局所麻酔を必要とするほどの疼痛はなかった。また、注射後炎症など副作用は発現しなかった。検査開始時間は、 ^{198}Au コロイドで 24 時間以後が適当であったのに對し、 ^{99m}Tc フチン酸では 2~3 時間後と短かった。撮像方向として、 ^{99m}Tc コロイド製剤使用例では、両斜位が両側のリンパ節を分離し、かつそれぞれ明瞭に描画する上に有用であった。臨床上、理学的所見と比較的よく一致する種々の画像パターンを観察できたが、中でも、2 例の ^{99m}Tc フチン酸使用例で、頭部のリンパ管影の出現が認められた。

本のページの訂正

訂 正

16卷2号掲載の地方会抄録表示に誤りがあり
ましたので、下記の如く訂正いたします。

第3回日本核医学会北日本地方会→

第4回日本核医学会北日本地方会